

「エール」よありがとう！

岡本吉生



ドラマの力に生かされたハーモニカ

NHK朝ドラ「エール」。その朝は何げなく観ていたら、聴き覚えのある音、というより吹き覚えのある音が聞こえてきた。「そうか、あの時録音した曲だ」。クライマックスのいいシーンで使われていた。

数年前、NHKでは「ファミリーヒストリー」で吹かせていただいたことがある。なんと言ってもNHKは全国区、きっとたくさんの方の耳に届いたことだろう。翌々日からの入院を控えてテンション下がっていたばかりに、その朝の放映は最高のエールだった。

昨年末、喉風邪をこじらせて肺のレントゲンを撮ったらもやもやが写った。CTやエコー検査、そして2日後には生体検査のための手術を控えていた。鬱々とした朝に全く予期しなかったドラマのラストシーン。主人公の古山少年が大将と呼ばれる鉄男の詩に曲をつけて山上でハーモニカを吹く。ハーモニカの音がテレビから流れるとぼくの心はいっぺんに晴れわたった。

半年前、小学生が吹くようにと言われてスタジオで4、5回の収録。ノンレガートでマイナー曲をメジャーで吹いて自ずと拙さが出た。自分のハーモニカをテレビドラマの中で客観的に聴くという体験はちょっと不思議だ。他人の音を聴くようで……。だがドラマのシチュエーションの中でその音は主人公の内面にうまく重なっているように思えた。ドラマの力に生かされたのだと思う。

NHK放送センターに出向いた日のことを思い出す。昨年10月5日、「愛川ハーモニカアンサンブル」の演奏収録が行われた日のことだ。大きなスタジオで一人ひとりに配されたマイクを前に、メンバーのやや緊張した面持ち。およそ1時間にわたる収録を無事終えて、ぼく一人4畳半ほどの小さなスタジオに移されてマイクに向かった。

「浮世小路行進曲」というへんてこりんなタイトルの曲。一体ドラマのどんな場面で、どんな風に使われるのか知らされないまま吹いた。不安な心持ちでスタジオの外に出た。廊下ではすでにリラックスした愛川のメンバーが「エール」のタイトルロゴを掲げて賑やかに記念撮影に興じている。早々と収録を終えて外に出たぼくを「えっ、もう終わり？」という表情で見る。

浮世小路の譜面は3日前に届いたが練習などしなかった。「皆様の素敵な演奏を拝聴できることを心よりお待ちしております」とメールをくれた担当者の期待が高かった分、自分のことよりはぼくが指揮をとる「愛川HE」の収録の方がよっぽど気がかりだった。

「愛川ハーモニカアンサンブル」での収録に向けて

朝ドラへの音の出演をお願いできませんか。そんな話が持ち上がったのはかれこれ1年前のことだった。梅雨の明けない7月初旬、「エール」の担当者から携帯電話に連絡が入った。詳細はメールしますと翌々日にはメールが入り、ドラマの内容や主演者が窪田正孝さんであることなどの番組概要が添付され、およそ15名から20名のハーモニカアンサンブルでクラシック曲の演奏収録を8月の末にやるので、メンバーの取りまとめと演奏可能曲を数曲知らせてほしいとの依頼だった。

1ヶ月と少しの中で演奏者を決め、演奏曲も決めて収録まで持っていく。かなり難題だと内心不安に思いつつ、めったにない機会と思いなし「わかりました」と電話を切った。

厚木には「あつぎグランドハーモニカアンサンブル」という屈指のアンサンブルがある。ただメンバーは遠方から寄り合い、月1回の練習しかやってない。20名を選抜するにせよ、指導者にお願いするにせよ調整だけで多くの時間を費やす。数曲を練習どころの話ではない。あまりにも時間がなさ過ぎる。

とっさに思いついたのは「愛川ハーモニカアンサンブル」なら可能かも知れないということだった。メンバー16名は愛川や厚木周辺に居住し機動力もある。特に傑出したアンサンブルというわけではないがまとまりはある。日常的にクラシック曲にも取り組み、前年作ったCD『ハーモニカアンサンブルへの誘い』には「皇帝円舞曲」「バルスレーネンネワルツ」「ジャズ組曲」なども収録した。週1回の練習をもう少し増やせばなんとかなるかも知れない。

早速メンバーに図った。朝ドラ出演といっても音だけの出演であること、練習を週2回に増やすこと、新たに編曲される新曲にも取り組むことなどを聞いた。メンバーは一様に是非やりたいとの声でまとまった。CD収録曲3曲にコンテストに臨んだばかりの「組曲カルメン」、そして「南国のバラ」の2曲を加えて都合5曲を演奏可能曲として提案。CDとともに番組制作担当に送付した。

7月22日、収録曲は「組曲カルメン」と「皇帝円舞曲」で決まりそうだと連絡が入る。それに新たに編曲される「想ひ出の徑」も収録する予定と。収録はNHK放送センターで8月29日ということになった。

いつまで待っても来ない譜面

私たちが収録するものは「福島ハーモニカ倶楽部」が演奏するシーンで使われるらしい。「想ひ出の徑」は学生の古山が作曲して定期演奏会のラストを飾る曲という設定だ。

実は「想ひ出の徑」はNHKによって昨年発見された古関裕而さんの作品で、長男の正裕さんによれば、それは学生時代のものではなく、昭和11年、古関さんが27歳のときに作ったものらしい。古関さんは日本コロムビア専属の作曲家として活躍中で、前年には「船頭可愛や」がヒット。この時期に様々なハーモニカやアコーディオンを使ったリード合奏譜を作ったのだ。プロになった古関さんにとってもハーモニカは特別な意味を持っていたのだろうか。実際この2年くらい前まで古関さんは「ミヤタ・ハーモニカ・バンド」の指揮で3年間も活躍されていた。

「想ひ出の徑」は軽快でチャーミングな楽曲だが未完成な部分もあって、作曲家の瀬川英史さんの手で新たに編曲されるという。ところがいくら待っても譜面は来ない。とても収録には間に合わないという思いの中でいつ譜面が来てもいいように、新曲以外の曲は仕上げておこうと2曲を中心に練習に励んだ。

10月5日と収録日が決まる

7月30日、担当者からハーモニカ演奏の収録日が9月中旬に延びる可能性ありと連絡が入る。スタジオのスケジュール調整を行って日程が決まり次第知らせると。8月の収録はなくなった。ひとまずホッと胸をなで下ろす。それにしても新曲の譜面はいつ来るのだろうか。

その後、ドラマの脚本家の異例の交代が新聞の小さな記事で報じられて動揺した。録音の話もチャラになってしまうのだろうか。担当者からの音信が途絶えて制作現場はゴタゴタしている様子が想像された。

9月13日、ようやく収録は10月5日との連絡が入る。さて、いよいよだ。2曲の仕上がりも上々だ。そんなとき9月15日、岩間朱美さんから電話が入る。ドラマの中で使う曲を収録するのだが、ぼくにコードハーモニカで参加してくれないかという要請だった。「曲は？」と聞いても「やさしい曲」と。収録は10日後の26日だという。ぼくでいいならと承諾する。9月16日には譜面が届いた。見て驚いた。なんと「想ひ出

の徑」ではないか。愛川HEのメンバーになんと言おう。譜面はさらにもう1曲、「自分へのエール」という曲。

9月19日、担当者より愛川HEでの新曲の収録はなしとの連絡が入る。「組曲カルメン」から「アラゴネーズ」と「闘牛士」、「皇帝円舞曲」だけを収録すると。早速メンバーに新曲なしを伝えると、意外にも落胆よりも安堵の声が多かった。



「想ひ出の徑」を多重録音で

9月26日、東京・東麻布にあるミラクルバススタジオにひとり出向く。地下にあるスタジオでは午前から岩間さんが収録をしている。複音、ホルンパート3人分を岩間さん一人で担当。各パート別録りで、当初、新井隆司さんのバスとぼくのコードも別々の録音予定だった。別録りもいいがバスとコードなら一緒にやった方がやりやすそうなので二人一緒に提案して受け入れられた。

「自分へのエール」は難なく収録を終える。「想ひ出の徑」になって様子がおかしくなった。バスとなかなか合わないのだ。なんと新井さんは違う譜面を持ってきてしまったのだった。実はこの曲、いくつかのバージョンを提示され、これでいきますと決められた楽譜があったのだ。

「書き直します」と新井さんは譜面とにらめっこ。収録に立ち会う作曲家の瀬川英史さんは「別々にとりましょう！」と。

新井さんはスタジオの外に出て汗拭き拭きで譜面作り。ぼく一人の収録が始まった。ほとんどワンテイクに何音かの直しをしてOKが出る。この日ぼくは教室の発表コンサートの前日仕込みがあつて早く戻らねばならなかった。新井さんはその後どうなったことだろう。気にはなっても構っている余裕などなかった。

「想ひ出の徑」はドラマの4月の第3週、「福島ハーモニカ倶楽部」の演奏会のクライマックスシーンで流れた。多重録音の仕上がりはこの日の放映で初めて耳にした。



古関裕而さんの思いにどれだけ寄り添えたか自信はない。けれど楽しい経験だった。愛川HEの収録も、ぼく一人の収録も、岩間さんたちとの収録もハラハラ、ドキドキの貴重な体験だった。テレビから流れてくるハーモニカアンサンブルの音を聴きながら、初めて緊張が解けたようなさわやかな気分を味わった。

「エール」に関わってたくさんの方の元気をもらえた。心から「エール」よありがとう！